

# 宇宙的楽観主義者を偲ぶ

## 1917–2008: A Space Optimist

Nature Vol.452 (387) / 27 March 2008

作家アーサー・C・クラーク（1917-2008）が未来の技術を見通す目の確かさは、敬服すべきものだった。我々は、彼の偉大なる楽観主義を大切に受け継いでいかなければならない。

1944年にロンドン市街を爆撃するV2ロケットに希望を見いだすロンドン市民がいたとすれば、およそ尋常な感性の持ち主とはいえないだろう。しかし、デズモンド・バナール、J・B・S・ホールデン、オラフ・ステープルドンらが描き出した宇宙ビジョンの影響もあってか、当時の知的環境は、実際にそうした楽観主義者を生み出していた。V2ロケットとは反対の方向に北海を飛んでいく従来型爆撃の研究に従事していた才気あふれる数学者のフリーマン・ダイソンは、「敵が効率の悪いロケットの開発に投入した資源は、より効率の高い戦闘機の開発に投入されずにすんだのだ」という機会費用の考え方に希望を見いだしていた。また、その後まもなく新進SF作家となる若きレーダー技術者のアーサー・C・クラークは、V2ロケットがヨーロッパ大陸から英国まで飛んでくる途中で大気圏外に出ていたことに希望を見いだしていた。これは、人類がほかの惑星まで飛んでいくための技術が手の届くところまで来たことを意味していたからである。当時の彼については、英国惑星間協会の仲間たちとパブで酒を飲んでいたときに、V2ロケットが飛来する音を耳にすると、立ち上がって、近々始まる宇宙時代に乾杯したという逸話も残っている。

去る3月19日に90歳で死去したクラークのこうした楽観主義は、容易には見えないものを見通す能力に裏づけられていた。彼は、作家としても、予言者としても、この能力を大いに活用した。クラークの著作は厳密な科学に基づいていた。彼は、静止通信衛星技術

を予想したばかりでなく、広大な領域をカバーする通信技術には世界各地の隔たりを小さくする力があることまで予想していた。1964年には、インテルサットシステムの構築に関する協定に調印する各国の要人を前にして、「皆さんはまさに今、最初の『地球連邦規約』に調印されたのです」と、いつもの楽観主義で語った。しかしクラークは、物事の明るい面だけを見ていたわけではなかった。彼が1960年に*Playboy*誌上で発表した短編小説『思い出おこすバビロン（原題 *I Remember Babylon*）』では、頹廃思想とポルノの衛星放送が皮肉たっぷりに描かれている。

クラークはしばしば皮肉を用いた。しかし、彼が作家としてなによりも伝えたがっていたのは、驚異の念、特に、超越的なものへの驚異の念だった。『2001年宇宙の旅（2001: A Space Odyssey）1964年刊』では、宇宙に浮かぶのっぺりした巨大建造物を覗き込んだ宇宙飛行士が、「信じられない！一星がいっぱいだ！」と驚嘆の声を上げる。宇宙飛行士の言葉が地球の管制室に届く瞬間、彼が今まさに越えようとしている科学の境界や、足を踏み入れようとしている宇宙への驚異の念が、我々読者にも伝わってくる。そんな瞬間を、クラークはたくさん見せてくれた。けれどもそこには人間への愛があった。彼は我々にいった。無限の広がりをも前にしても、我々はとるに足りない存在などではないのだ。永遠に未来の岸辺に立ち続ける我々は、自分がちっぽけでな存在であることに屈辱を感じる必要などないのだ。

クラークの小説に描き出された月面都市や木星への有人飛行に関する技術的ビジョンは、スタンリー・キューブリックの手により壮大な映像として表現された（米国で1964年に初公開）。その両側には「岸边」の風景があった。1つは、「月を見るもの」と彼が名づけたヒトザルにおける人間意識の芽生えであり、もう1つは、宇宙時代のオデュッセウスが、星々のトンネルを通り抜けて、大きな変貌を遂げる直前の地球へと帰還する旅である。クラークはいった。我々は、「月を見るもの」として、あるいは「月面を歩くもの」として、常に歴史的一步を踏み出しながら、ある意味では、常に歴史以前のところにいる。一筋の太陽の光からまばゆい一日が始まるのを眺めることは、彼にとって大きな喜びだった。

1970年代、著名な数理物理学者となっていたダイソンは、最も遠い未来まで生き続ける生物の可能性を探究していた。これは、クラークの魂を揺さぶる着想だった。クラークは、次のように返信している。

宇宙の本当の歴史が始まるのは、今から数十億年後のことになるだろう。

その歴史は、ぼんやりと輝く恒星が発する赤い光と赤外線のみによって照らされることになる。その光は、我々人間の目にはほとんど見えない。

しかし、その環境に適応した奇妙な生物の目には、ほとんど永遠に続く薄暗がりも、色彩と美しさに満ちあふれて見えるのかもしれない。彼らは、自分たちの前に数兆年の未来が広がっていることを知るだろう。

彼らには、すべてを試み、すべてを知るための、無限の時間が与えられる。彼らは神のような存在となるだろう。彼らが獲得する力は、我々人間が想像するいかなる神をも凌ぐものとなるだろう。けれども彼らは、我々をうらやましく思うかもしれない。我々は、天地創造の輝かしい残光を浴び、若かりし日の宇宙の姿を知っているからである。

超越的なものを前にしたときに満ち足りた落ち着きを感じ、盲目的な信仰心ではなく知的な探究心に由来する驚異の念に希望を見いだせる資質は、科学者には多かれ少なかれ備わっているかもしれないが、一般にはめったにないものである。クラークは、その資質を広めることに生涯を捧げた。残された我々は、これを大切にしていかなければならない。 ■

本記事の訳出には一部、『2001年宇宙の旅』伊藤典夫訳（早川書房刊）を参考にした。

著作権等の理由により画像を掲載することができません。

著作権等の理由により画像を掲載することができません。



上の写真は、映画『2001年宇宙の旅』より。

86歳のときのアーサー・C・クラーク。2003年スリランカの彼のオフィスで。